

### 3 花 き

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 露地花きの湿害対策</p> <p>(2) 施設花きの病害・生理障害対策</p> <p>(3) シンテッポウユリの栽培管理と収穫</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○露地花きの湿害対策</li> <li>○施設花きの病害・生理障害対策</li> <li>○シンテッポウユリの露地栽培管理と収穫</li> <li>○シクラメンの施肥管理</li> <li>○ハボタンの育苗</li> <li>○デルフィニウムのほ場準備</li> </ul> <p>7月は梅雨期の高温多湿により病害が発生しやすくなるので、予防的な農薬散布を徹底する。梅雨後半には前線の活動が活発になり、大雨や局地的な集中豪雨が起こりやすくなるため、排水溝の確認や再整備により排水能力を高めておく。</p> <p>また、降水量が多くなると土壌中の肥料が流亡するので、追肥を行うとともに軽く中耕して土壌中に酸素を供給する。なお、根痛みで日中のしおれが回復しない場合は、薄い液肥を葉面散布し、草勢が回復してから追肥する。</p> <p>露地栽培と同様に高温多湿になる。灰色かび病やべと病等の病害が多発、まん延しやすくなるので、送風や換気により湿度を低下させるとともに、雨の間の防除を心がける。</p> <p>また、トルコギキョウやばらなどでは、曇や雨天が続いた後の晴天や梅雨明けの強い日射しにより、葉や花弁に焼け症が発生しやすくなる。そのため、寒冷紗等で必ず遮光し、植物体の昇温と過度の蒸散を抑える。</p> <p>7月中旬頃からは早生系品種の収穫期となる。日中に採花すると花弁に焼け症が発生する可能性があるため、特に晴天時の採花は気温の高くない朝8時頃までに終了する。切り花は直射日光が当たらないよ</p> <div data-bbox="837 1534 1401 1926" data-label="Image"> </div> <p>写真 収穫間際のシンテッポウユリ</p>

項 目	作 業 内 容
(4) シクラメンの施肥管理	<p>う収穫クロスなどに包み、できるだけ早く水上げし、調整した後に冷蔵庫内で保管する。採花の適期は開花4～5日前で、蕾が白味を帯びる前の緑の状態である。</p> <p>なお、シンテッポウユリは他のゆりに比べ生育にばらつきがあり、採花期間が長くなるため葉枯病の防除を徹底する。</p> <p>7月はシクラメンの花芽形成期であり、植物内のチッ素濃度が高すぎると花芽形成が遅れる原因となる。このため7月下旬より液肥のチッ素濃度を30 mg/L (ppm) に落とし、葉色に注意しながら生育をやや抑え気味に管理する。ただし、リン酸とカリは十分に与える必要があるため、含有比率の高い置き肥を施用する。さらに、夏場はカルシウム欠乏が出やすいため、カルシウム剤を2週間間隔で10月頃まで継続して散布する。</p> <p>また、11～12月に開花する花の花芽分化は7～8月に完了するが、マッチ棒の大きさ以上に発達した花芽では25℃以上の高温で伸長抑制や生育阻害が起こりやすくなる。晴天時には50～70%の遮光資材を展張し、換気を十分に行うことで施設内の昇温防止に努める。遮光による照度不足は葉や葉柄が軟弱になる原因であるため、鉢の間隔を広げ受光面積を確保する。</p>
(5) ハボタンの育苗	<p>年末出荷向けは7月中旬～8月上旬には種し、は種には200穴のセルトレイを用いる。は種が遅れると十分な葉数を確保できなくなるので注意する。</p> <p>25℃程度が発芽適温であるが、それ以上の高温では発芽が抑制されて不揃いになるため、黒寒冷紗などで遮光する。発芽後は、徒長防止のため遮光を中止する。</p> <p>また、高温期は胚軸が伸びやすく腰高の苗になりやすいので、子葉が展開した時期(は種後5日目頃)にわい化剤を処理する。</p> <p>ポット上げの時期は、は種後20～30日(本葉2、3枚頃)を目安とし、それまでは週1回程度液肥を施用する。</p>
(6) デルフィニウムのほ場準備	<p>6月で収穫を終えたデルフィニウムは、放置すると病害虫の温床となるため早期に除去する。その後のハウス内にはソルゴーをは種し、土壌改良を図る。除塩を兼ねた栽培目的でもあるため、は種後約50日でソルゴーを抜き取り、ほ場外に持ち出す。</p>

(作成 農林水産研究所)